

## は し が き

センター長 江 口 修

98年も大学をめぐる内外でさまざまな動きがあり、教官各位もそれぞれの立場からさまざまに対応されたことと思います。組織的には独立行政法人化をめぐる議論が活発だったようですが、言語教育に携わるわれわれにとって最大の問題は一部学生の学力低下でした。入試の多様化にともなって入学してくる学生の基礎学力が以前にもまして一様ではなくなりました。これまでの、いわゆる普通高校から一定程度の水準をクリアした学生を対象とした「相手の見当がつく」教育から、「ひょっとしたらある部分が欠落しているかもしれない」者もいるリスクを前提とした教育の必要が生じてきています。実力別クラス分けでは単純に解決できないところにまで問題は深刻化しているのではと危惧されます。文部省も事態の深刻なことを認め「補習授業」に対する予算措置を講じていますが、補習は単位として認められないため、教える側も教わる側もいま一つモチベーションの高まりに欠けるきらいがあるようです。ともあれ本学のカリキュラム全体の見直しが日程に上っている以上、以上の問題解決とも連動する言語センターのカリキュラム改革を着実に立案実施することが求められています。関係各位のご協力を期待しております。

さて、国際交流の深化の中で本年度はヨーロッパ関係で大きな動きがありました。すでに学生交換交流協定を結んでいたドイツバイロイト大学との留学生交換が10月よりスタートしました。そしてアカデミー・メルキュール校と交換研修が行われてきたフランスについても、本格的な学術交流協定とそれに付属する形で学生交換交流協定がフランスエクス＝マルセイユ法・経済・科学大学との間で調印されました。これには本センターの高橋教官が担当国際交流委員会委員として尽力されました。心より感謝申し上げます。これで文字通り欧米系との交流が実現することになり、言語センターの語学教育も一段のレベルアップを図らねばなりません。そうした流れの中で、ドイツ語関係では、第2回春期ドイツ語インテンシブコースが3月30日から4月3日までの5日間本学で開催され、2レベルで14名が参加。また、札幌姉妹都市協会に主催による第17回ドイツ語暗唱大会が平成10年10月24日に札幌国際プラザで開催され、7名の本学学生が参加。内1名が3位に入賞。さらに、かねてより懸案のオーストリア・ドイツ語検定試験（これは国際的に認定された本格的なドイツ語検定試験で、ライセンスを持つ試験官〔大塚教官が昨秋研修を受けて取得〕、3人以上の受験者がいればこの大学でも実施できる）の導入が実現した。本年は1月5日から8日まで準備コースを実施し1月10日に試験を行い、4名が受験、等々着実な進歩が見られます。

さて本センタースタッフの動きについてもご報告しておきましょう。まずは長年にわたって本学英語教育をリードしてこられた豊国孝教授が平成10年度末をもって定年退官されます。室蘭工業大学から移られて以来19年間、ご専門のD.H. ローレンス研究で滋味深い成果を世に問われながら、その情味ゆえでしょうかある時には妥協を許さない厳しさを見せられた高度な英語教育を実践されてきました。そしてなによりも、その温厚なお人柄で外国語系教官組織の運営に指導力

を発揮していただきましたことに心より感謝申し上げますとともに今後ともよろしくご指導くださいますようお願いいたしますと存じます。その他では、残念ながら外国人教師のクリスチヌ・マックスウェル嬢がご都合でわずか一年で本学を去られることになりました。先生のご健勝とご発展をお祈りいたしましょう。

さて、文部省在外研究員としてスペインバルセロナ自治大学で研修されていた山田真史教授が9月帰国されました。本年度末には高井収教授が同じく文部省在外研究員として渡米されます。8月に出国され中国北京大学に中国政府招聘研究者として滞在されていた萩原教官が無事研修を終えられ2月25日帰国されました。吉田直希助教授は新年度4月に帰国される予定です。短期の海外出張研修はいよいよ盛んで、遺漏なきことを祈りつつ順を追ってご報告しておきましょう。5月30日より6月3日までと9月4日から11日までの二度、高井収教授が米国ポートランド州立大学に共同研究打ち合わせのため出張。7月25日より9月16日まで、下村五三夫教授がポーランド学士院農村社会研究所との共同調査のためポーランドに出張。7月26日より8月9日まで、裴崢教授（当時助教授）がオーストラリアメルボルン大、ウーロンゴン大等に外国語教授法の調査で出張。大島稔教授は科研費国際学術研究「環太平洋における危機に瀕した原住民言語に関する緊急調査」で8月13日より9月13日までロシア極東地域に出張された。外国人教師クリスチヌ・マックスウェル嬢は米国パデュー大に第二外国語としての英語教育法研修で出張された。年末にかけては、外国人教師ブライアン・ペリー氏が12月16日から1月17日にかけて英語教育セミナー参加等で英国ウォリック大学に出張。下村教授は12月16日より1月13日までポーランドワルシャワ大、フィンランドヘルシンキ大でソ連邦解体後の東欧の大学におけるカリキュラムとテキストの変化を調査するため出張。裴崢教授も12月22日より1月10日まで中国語・日本語教育に関する研究資料調査のため北京、南京の各種教育機関を訪問。高橋純教授は前述の交流協定等短期留学プログラムに関する調査のため1月16日から25日まで、フランスエックスマルセイユ法・経済・科学大、英国ヨーク大、オランダライデン大に出張された。年度末には小林敏彦助教授が洋画の談話分析準備のため米国ロサンゼルス、ハリウッドに3月25日より28日まで4日間出張の予定。下村教授も3月14日より4月7日までポーランドおよびドイツにアムールベイズンアイヌについての資料調査他で出張される予定。

いわゆる短期留学プログラムの概算要求が認められ、新年度から正式にスタートすることとなりました。国際交流センターと協力し、本学学生の送り出しを円滑にするために外国語教育の高度化を進めるとともに、受け入れた外国人留学生の協力をえて異文化交流の実践と研究の充実を図らなければなりません。スタッフ全員の奮起を期待します。